

令和4年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(学校推薦型選抜Ⅱ)

小論文

(医学部 保健学科)

(注意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は2ページ、解答用紙は1枚である。指示があってから確認すること。
3. 解答はすべて解答用紙の指定のところに記入すること。
4. 下書きをする場合は、問題冊子の余白を利用してよろしい。
5. 問題冊子は持ち帰ること。
6. 解答用紙は持ち帰ってはならない。
7. 解答用紙の上の欄に受験番号を記入すること。

令和4年度 鳥取大学医学部保健学科入学者選抜試験
(学校推薦型選抜Ⅱ)

問題 次の課題文を読んで後の問いに答えなさい。

毎日、何をやっていいかわからない。やることがない……。

そうなってくると、人間はどうしても気力を失いがちになる。

足を悪くしたりすると、いきなり心も身体も弱らせてしまう人が多いのもそのためだといえる。足のケガに限らず、入院中などにもそうなりやすい。病気による症状とは別に無気力になっていく人はよく見かけられる。

入院中にしても、ちょっとしたことから張り合いが生まれるケースもないわけではない。たとえばある病院では、院内の案内や患者の介助など、簡単な仕事をするボランティアを患者のなかから募るようにしていた。経費の問題だけでなく、患者のことを考えてのことなのだろう。入院生活によって気持ちを弱らせてしまっていた患者がその役割を引き受けると、元気を取り戻していくことが多かったというのだ。

ボランティアとして活動するうちに、自分を頼りにしてくれる人がいるのに気がつくからだと考えられる。誰かの役に立つことや小さな労働は、心の筋肉を動かすということがよくわかるエピソードである。

こうした変化を起こすのは、ボランティア活動だけには限らない。

目の見えない人をわずかな距離でも誘導してあげたり、土地に不案内な人を目的地まで案内してあげたりすれば、やった側の心は、ぽっと温かくなる。

ご近所に住む足の不自由な人の買物を代行するなどといった小さな労働でも、そこに人間同士の関わり合いが生まれるものである。

それが、喜びとなり、張り合いとなる。人間は、自分が他人の支えになっているというだけで、責任とやりがいを覚える。

高齢者に対して、「何もしなくていいから」と言う人がいる。体力が落ちてきた高齢者に善意から、「おじいちゃんは座っていて」、「おばあちゃん、家事は私

がやるから」などというわけだ。

しかし、人間というのは、働きたい、何か人の役に立ちたいという気持ちを絶えず持っている。多少、体が不自由になっても持ち続けるものである。

家の中で「お客さん」扱いされるのはかえってつらいということは先にも書いている。「何もしなくていい」というのは、「生きるな」と言っているのに等しい。

何歳になろうとも、何かをやりたい気持ちはある。

そういう気持ちはなくしてはならないし、奪ってはいけない。

出典：森村 誠一。「老いる意味」うつ、勇気、夢（中公新書ラクレ 2021）

より抜粋・一部改変。

問. この文章を読み「誰かの役にたつこと」について、あなたの考えを

600字以内で述べなさい。